

華嚴教学における正統と異端

鎌田茂雄

只今、御紹介にあずかりました鎌田です。大谷大学は華嚴学の輝やかしい伝統を持っておられる大学でありまして、そこで私のような素人の、華嚴学の伝統を受けていない私意的な研究を進めた者を、お招き頂きまして本当に光榮に有難く存じ上げます。

私はここ七、八年来、韓国や香港と、国交がありました時代には台湾にまいりまして、中国の佛教の儀礼、あるいは韓国佛教の儀礼の研究をしてきたのですが、それは宗教の研究というのは、一つには教理、一つには教団、一つには儀礼、この三つの面からの研究がなされないといけないと考えたからです。現在では教理学の研究は、国立大学におきましては印度哲学科において、宗門大学においては佛教学部におきましてやられております。

教団の研究については、例えば中国佛教で申しますと、東洋史学の出身の研究者がこれをすすめておりまして、おそらく大谷大学であっても史学科の中で中国佛教史というものが取り扱われているのではないかと思えます。

儀礼の研究は宗教学の面からやられておりまして、これは佛教学とは殆んど関係なく、アメリカの行動科学の理論を導入致しまして、それを推進しております。この三つはバラバラですが、私の考えではどれか一つに重点を置きま

して、他の二つの面を絶えず考慮しながら問題を考えていかなければいけないのではないか、というように考えまして、ここ六、七年実態調査をつづけていますが、その中で色々気がついたことがあります。

それは儀礼の研究の面だけではないのですが、私達は日本の佛教の伝統を受けているのですが、朝鮮半島では朝鮮の佛教があり、中国本土においては、中国佛教というものを持っております。そして私達が読誦する経典は漢訳佛教の経典であります。そうなりますと、漢訳経典、漢訳大藏経を中心とした一つの佛教圏がそこにあるのでして私はそれを東アジア佛教圏と名づけているのであります。東アジア佛教圏というものは、東アジア世界を形成する一つの要素であります。

東アジア世界とは政治的には冊封体制、つまり中国を中心としてその周辺にある勃海、朝鮮、日本、さらにはベトナムのような隣接した区域をいうのです。

東アジア世界を形成する支柱は三つあります。まず第一には律令体制がそれを支えています。それから第二には中国佛教の伝播ということがいえると思います。第三には漢字文化圏というものがそれを支えております。

東アジア世界を形成する要素の一つと致しまして、中国佛教というものがあるのだと考えて下さい。中国佛教が中国本土、朝鮮半島、それから日本へと伝播しているのですが、それぞれの国の佛教を比較しますと、同一性と異質性の問題がある。中国佛教と日本佛教と同じ所もあるし、違う所もある。そういうことを、とにかく考えて見なくてはいけないというようなことを、しばらく足で歩いてやったわけです。

そういうことをやりながら、色々考えました結果ですが、朝鮮半島の佛教というものを少し独立させて考えないといけない。同じ東アジア佛教圏の中で、中国佛教と朝鮮佛教と、ここで朝鮮佛教という言葉を使いますのは、地理的の朝鮮半島に移植され、そこで成熟し、展開した佛教、という意味です。朝鮮佛教と日本佛教というものは、地理的ですが、従来はそれが非常に似たものであると考えられていたのです。そうではなくて、同じ漢訳佛典によっているけ

れども、かなり性格が違うのではないか、ということを考えております。その結果を、華嚴学の研究に反映させて見ると、一体どういふことになるのだろうか、ということをお私自身の問題意識にしてきたのです。

従来、華嚴教学と申しますと、大成者が法蔵、そして清涼澄観しょうじやうていけん―圭峯宗密けいほうしゆみという中国の伝統があります。杜順―智儼―法蔵―澄観―宗密、これを華嚴宗の五祖と申しますが、法蔵と澄観の間は断絶があります。後の人がそれをデッチあげまして、こういう法統を作ったのです。慧苑は法蔵の弟子ですが、澄観によって師の説を否定した、けしからぬ人であるというので抹殺されます。李通玄というのは、どの伝統にも属さないで、一人で華嚴經を読み、一人で華嚴經の実践をした人でありまして、いわば疎外者でありますし、単独者でありますし、全くそういう法統とは関係ありません。

このような中国の華嚴を勉強するには、従来は法蔵、澄観というものを研究するのですが、そして法蔵、澄観の二つを大体合わせたものを正統と考えます。それを正統としたのは鎌倉時代の凝然であります。凝然が巧みに法蔵と澄観とを合わせまして、東大寺系統の華嚴というものを作っていたのです。本寺派といつてもよいのですが、それに對しまして同じ鎌倉時代に、凝然より少し早く明恵上人が出ております。

明恵上人は高山寺華嚴、あるいは末寺派ともいわれますが、高山寺系統といわれます。この二つの派のうち凝然を正統、明恵上人を異端として、正統、非正統というように考えているのです。

どうしてそういう考え方が定着したのかというと、正統・異端という言葉ですが、始め、正統というものがあって、そして異端ができるのではなくて、いろいろなものがありまして、その中で一番社会的な勢力を得たもの、あるいは教義学的にも何かそこに権威を得たもの、それが正統になって他を異端と名づけるわけでした、始めから決まっていたわけではありません。何故、こちらが正統派でこちらは異端派なのか、ということをお、中国の華嚴と、それから朝鮮の華嚴との関係から問題を考えて見ようというのが今日のお話です。

まず明恵上人と凝然大徳の学問の特徴と申しますか、それを簡単に申しあげます。

明恵上人は皆さまも高山寺をよく御存知と思いますので、別に説明する必要もないと思います。彼は紀伊国きいこくに生まれたのですが、小さい時に御両親を失っておられます。そうして八歳の時に高雄の神護寺に預けられております。それから東大寺で勉強したのですが、どうも東大寺で勉強しても本当のものは得られないといひまして、和歌山県の湯浅の栖原村すはらの白上の峰というところに行っております。

私も二年前に現地調査に行つたことがあるのですが、沢山、島が見える湾でして、和歌山からもう少し先ですが、そこに海の見える断涯絶壁の山の上に庵あんを作りまして、そこでひたすら修行をなさつたのです。それからインドに渡ろうとしたけれども、それを中止したというようなお話もあります。とにかくその後、高山寺に入りまして、ひたすらに華嚴教学を勉強し、更には真言密教を学ばれまして華嚴密教、すなわち嚴密げんみつというものを確立されたのです。

一方、凝然大徳は求道者として通した明恵とは違ひまして、ひたすら学問に励まれた方です。佛教史としては、『三国佛法伝通縁起』という本をお書きになつておられますし、華嚴学では彼の華嚴学を大成した『華嚴法界義鏡』を書いておられますし、その他、『五教章』に註釈をつけたり、『探玄記』に註釈をつけたりしておられます。

明恵上人は実践に生きた方、凝然大徳は学問に生きた方です。凝然が亡くなられる前に書かれました、『五十要問答加塵章』という本がありますが、その奥書きには、老眼をぬぐい、病手を励まして著作をしたことが記されております。とにかく八十二歳で著作をなさつておられます。老眼をぬぐいということは本当に眼が見えないのではなく、儀礼的にそう書く一つの慣行があるのだということ、東大史料編纂所におられました玉村先生から伺つたことがあります。とにかく本の奥書きの最後に老眼をぬぐい病いの手を励ますという文句が見えます。それから他の所には老眼の涙あふるるをぬぐい、中風の右手を励ます、昼は日光に對し勇を起し、夜はともしびをかかげて眠りを覚ます、というようなことを書いておられます。そしてひたむきに学問をなさつた。学問をすることが行であつたので

す。明恵上人は本当の安心、悟りを得ようとして、佛光観という観法を修されたのが彼の生命であったのです。どちらもひたむきという意味では非常に共通するのではないかと思います。

凝然は、日本の華嚴宗は東大寺を根本とするという確信のもとに、華嚴学研究に没頭されたのです。八十二年の生涯で二百二十五部一千二百余巻を著されたといわれております。大変な量で、おそらく著書は等身どころか、著書が身長をずっと越すのではないかと思われます。それだけ学問に生きられた。また一方では戒律の研究をなさいまして、『梵網經』に対する註釈を書いておられます。それも修辭改定すること四十年余りです。私どもは一寸論文でも、本でも書くとききっぱなしでありますし、それにくりかえし手を入れることは容易なことではありません。親鸞さまの『教行信証』のように、手を入れ手を入れて何十年も手を入れてやるという、そのエネルギーは大変なものであろうと思います。

一方、戒律の本を書かれた凝然に対しまして明恵は戒律を実践されたのです。日本佛教史の学者であられた辻善之助先生が、日本佛教史を通じまして、一生不犯であったのは明恵上人ただ一人ではないかというようなことをどこかで申されたということを、また聞きしたのですが、明恵の伝記を拝読致しますと、

「たひたひすて度度既に姪事を犯さんとする便りありしに、不思議の妨げありて、打ちさまし打ちさましして、ついに志ざしを遂げざりき」

姪欲を行ずる機会に度々恵まれたんだと、けれどもその時に何かの障害があつて、それを為すことができなかつたんだということを書いておられる。

この一文を辻善之助博士が御覧になられまして、御自分でこういうことを言っておられるということは、本当に一生不犯を通されたんだということをいっておられるわけですが、とにかく戒律を自分の身に科したのです。例えばこういうことを『遺訓』の中で申しておられます。

「人の信施は内に叶ふ徳ありて受くるは福なり。破戒の比丘、若し後世の報なくば、衣は炎網と成って身を焦し、食は熱輪と成って腹を穿たん事、必定して疑なかるべし」と。

お布施を受けるときに内に本當に具わったものがなければならぬ。破戒の比丘がお布施を受ければそれは大変なことになるのだ。炎となって身は燃えてしまうのだということをいわれたのです。これほど自己に厳しい明恵上人は修行の面でもこういうことをいっておられます。

今日だめだったら明日やらなくてはいけないということですが、

「ただ久長の志をひっさげて、今日極めずば明日、今日悟らずば来月、今年相應せずば来年、今生証せずば来生、と深く退屈せず、火をたくが如く励むべし」

ということを言っておられる。今日だめなら明日、明日だめなら明後日というように、とにかく一生求めなければならぬという。それでは何故、何の為に、何のエネルギーがその求道心を沸き立たせるのかと申しますと、それは一番大きな欲望を持っているからです。『華嚴經』に出てくるのですが、一番人間の大きな欲、大欲は何かと申しますと、真理を求める欲望だと、それを清浄の欲というわけです。

「清浄の欲というのは佛道を願う心なり。佛道におきて欲心深きものは必ず佛道を得るなり」と。

明恵の求道を支えた背景は清浄欲にあることがわかります。これこそが人間の欲望の中の最高の欲なのであると彼はいつているのです。

それでは時間の関係でこまかいことは省略致しまして、明恵上人と凝然大徳という方はそういう方なんだということがおわかりいただけたかと思えます。明恵は一生、高山寺におきまして求道者として生きられた方、凝然はひたすら八十二歳まで学問一すじに生きられた方だということを御理解頂けたと思います。

今度は、この二人の学問の内容に入るわけですが、どういう風に中国の華嚴を撰取しているのかということですが、

どのように二人は中国の華嚴を受けとめているのかということですが、まず明恵上人からお話し申し上げますと、明恵上人は初めは宗密の教学を受けたのです。宗密に『円覚略疏』という本がありますが、これを高山寺で講義しました。そしてだんだんと聞くものが少なくなると、最後は松の枝を見て講義されたという逸話があります。ところがあつる時点から李通玄を受けるようになった。そうして李通玄がやっておりましたところの、佛光三昧觀という觀法を修された。

どうして法藏とか智儼とかいう初期の華嚴学を受けないで、宗密乃至は李通玄を受けられたかということが問題なのです。明恵は李通玄の『華嚴經論』と偶然に出会ったわけです。宋から華嚴教学の典籍が来た。それと偶然に出会いまして、佛光觀というものをお知りになった。この出会いについて何と申しますと、

「この論未だ広く流布せず、慮わざる因縁に依つて大宋朝より之を得たり。予、この文を見るに深く愛樂を生ず」
『佛光三昧觀冥感伝』と。

宋から李通玄の『華嚴經論』が送られてきた。それを偶々見て、これはと飛びついたわけです。これはと飛びつくまでには、そこに至るまでの一すじの求道の道がないといけない。そこに至るまでの高まりがあったからこそ、李通玄が説いた佛光觀と、明恵が求めたもののが一致したわけです。これは与えられたものではなくて、明恵の内発と、外から与えられた因縁によってそれが熟したと考えるしかないと申します。そうして『入解脱門義』という本をお書きになられたり、佛光觀に関する著書色々お書きになられたのです。

一方、凝然はどの華嚴を受けられたかということですが、凝然は華嚴学に関しては先程書きました『法界義鏡』『華嚴宗要義』などの他、十重唯識に関する註釈書がいろいろありますが、先程申し上げましたように『法界義鏡』が最も代表的な著作です。

凝然はどのようにして『法界義鏡』を書いたかといいますと、最初に申し上げましたように、法藏と澄觀とを巧み

に取入れております。『法界義鏡』の原文を全部原典にあたりまして、それを比較して分析しますと、まことに巧みに法蔵の教学と澄観の教学が合わさっている、ということですよ。

例えば、華嚴教学では一真法界ということをよく申します。それから四種法界ということも申します。この一真法界を一番最初にとりだして『法界義鏡』は議論を展開していくのですが、この凝然によって確立された華嚴学は、その後の日本の華嚴学の方向を決定せしめたのです。

例えば華嚴学の権威湯次^{ゆすじ}了榮先生に『華嚴大系』という本があります。これは最もすぐれた華嚴学の概論書でありますが、この中では、凝然が『法界義鏡』で展開したものをそのまま受けておられる。一真法界論という構成そのものも、四種法界という構成そのものもです。これは凝然がなされました仕事を忠実に伝承しておられるということが明らかになります。

ここで一寸余談になりますけれども、この智儼と法蔵の華嚴学と、澄観と宗密の華嚴学は違うんだということは昔からいわれておりました、前者はひらたい言葉でいいですよ、哲学的な構築が主であり、後者は実践的な立場、すなわち禅を中に取り入れて構成した華嚴学であり、密にいうならば華嚴教学というのは智儼・法蔵までで、澄観・宗密は本當の華嚴教学ではないんだといったのは江戸時代の鳳潭^{ほうたん}です。鳳潭という学者はこれまた大変な学者でして、華嚴教学だけではなくて、密教やら天台教学やら、何から何まですべてやった人です。ただ後の学者たちによって鳳潭は正統ではないといって否定される、批判されるのでありますが、一人であれだけ各宗の教学をこなしながら、議論を展開した人というのは一寸いなのであります。

私も正確には知りませんが、佛教の史的展開を始めて加上法^{かじょうほう}という方法によって論証した富永仲基が、鳳潭の『法華経』の講義を若い時に大阪で聞いたということがいわれております。その時代は富永仲基であるとか、その後は排佛論を書いた山片蟠桃であるとか、偉い天才が陸統として出ている時代です。日本の思想史を通じて天才が三人いる

んだと、内藤湖南先生がおっしゃったそうですが、その中の二人は富永仲基と山片蟠桃です。そういう人が鳳潭の講義を聞いたということですよ。

智儼と法蔵、澄観と宗密は異なる教学ですが、凝然が実に巧みにこの両者を一緒にしたのです。

その次にもう一つお話し上げたいことは明恵上人に影響を与えた宗密教学に関してであります。明恵の弟子に証定という人がいます。この人は始め坊さんでしたのですが、途中で止めてしまい、居士になって本を書いた。どういふ本を書いたかといいますと『禅宗綱目』という本を書いた。

かつて大屋徳城博士がこの本を発見なさいまして紹介しました。この本は高山寺と京都大学と鎌倉の松ヶ岡文庫にあります。宗密の『円覚經大疏鈔』という本があります。『禪門師資承襲図』という本もあります。そういうものをそのまま撰取して『禅宗綱目』を作ったのです。証定は明恵についてずっと修学したのですが、明恵―証定の教学に宗密の影響が強かったということはこの本を見るとよく分ります。

もう一人鎌倉時代に朗遊という学者がいます。この人は全く系統がわかりません。東大寺系か高山寺系かわかりません。この人の書いた本を見ますと、宗密教学の影響が強い。教判論では凝然の五教判と較べますと全く違う。そして『禅源諸詮集都序』に説かれた禅の三宗というものを全面的に取り入れて入れているのです。朗遊の本は『華嚴香水源記』という本です。これは『日本大藏經』にも集録されていまして、見ることができのですが、この人の伝記はわかりません。宗密の『禅源諸詮集都序』の全面的な撰取ということから考えまして、明らかに明恵―証定―朗遊の系統は東大寺の華嚴とは違った中国華嚴学の影響を受けているのであろうということがいえると思います。

もう一つ明恵の教学に大きな影響を与えているものに中国の遼の密教があります。遼という国は北の方の国でありまして、大遼シャーマニズムの強い所だったそうですが、遼の密教というものは、これは独特のものでして、『大日經演密鈔』というような本があらわされていますし、その他『釈摩訶衍論』の註釈があります。大日本統藏經の中に、

いくつかが入っておりますが、一部大正新脩大藏經にも入っております。この影響を受けまして、光明真言に関する著作を明恵が書いているのですが、遼の密教の著述を引用して、論じているのです。

明恵に与えた大陸佛教の影響は、まず華嚴学では宗密の影響、李通玄の影響、それから遼の密教の影響というものがあるのです。凝然に与えた大陸佛教、大陸華嚴の影響は法藏と澄観、もちろん智儼もありますが、法藏と澄観とを巧みに合わせたというのが凝然の大きな特徴です。

最後に明恵と朝鮮華嚴との関係を少し考えて見たいと思います。と申しますのは、明恵の弟子が絵に書いたものに『華嚴絵巻』というのがあります。『華嚴縁起絵巻』を簡単に『華嚴絵巻』といいますが、絵巻物になっている。一体、何の絵が書いてあるかというと、題名には、華嚴宗の祖師の絵と書いてある。華嚴宗の祖師の絵というならば、誰を書けばよいかといえ、中国では法藏を書いたらいいでしょう。あるいは一番初めの杜順を書いたらいい。あるいは日本の華嚴で東大寺に關係する人としては、東大寺を造った良弁りょうべんであるとか、あるいは初めて講義をした審祥しんじょう大徳であるとか、そういう人の絵を書けばいいのに、何もそういうものは書いてない。誰の絵を書いたかというと、義湘と元曉の絵を書いた。義湘と元曉というのは、二人とも新羅の方です。義湘の絵が四巻、元曉の絵が二巻です。

義湘と元曉というのは、二人とも仲のいいエリートでありまして、長安（大陸）に行きまして、華嚴を傳承しようとしたのです。そこで港へ出る途中とある山の中で野宿をした。その晩、真暗な中で洞穴ほらあなへ入って泊まった。朝起きて見たら、そこには骸骨がいっぱいある穴だったと気がついた。それでとても翌晩は野宿ができなくなりました。夜、何も知らないときには平気で野宿ができた。このことを元曉が悟りまして、一切のことはすべて自分の心から生ずるのであると、だから心の他の師をたづねべからずと悟ったといっています。そこで中国へ留学して華嚴を勉強する必要はない。本土に留まって、そうして勉強すれば自分はいんだといつて行かなかった。

一方義湘は、海を渡って長安まで行っております。誰についたかというところ、智儼についた。だから法藏と義湘は兄

弟弟子なんです。学統は中国では法蔵が継ぎ、新羅の華嚴は義湘が継いでいるのですが、兄弟弟子です。そして法蔵が義湘へ手紙をやっております。その手紙が現存しております。それによって密接度がわかります。

義湘というのは王子様で、エリートでありましたので顔も立派だったと思います。長安で一人の女の人に恋をされた。その女の人は義湘が好きになったわけです。ところが義湘は自分は出家の身であって、あなたの愛を受け入れることが出来ないといいましたら、その女の人が尼さんになったのです。そして名前を善妙尼とした。今度は一緒に勉強するようになる。それから義湘の帰国が近づいた。善妙に話すと一緒に来ると大変だということで、一人で港まで逃げていったのです。義湘を乗せた船が港を離れた。その時善妙が岸まで追いかけてきた。見ると義湘の乗った船が遙か沖まで行ってしまった。それで善妙は自分の身を海に投げて龍となって、義湘の船を守ろうとした。その龍が義湘の船の横を泳ぎながら守護している絵が書かれています。原本は京都国立博物館にあります。

そして朝鮮半島に着いた。義湘は大変活躍致しまして、いろんな所へ寺を建てた。その一つに浮石寺フツクシという寺があります。この寺を義湘が建てようとした。これを建てようとしたときに、他の坊さん達が義湘を妨害した。これを建てさせまいと義湘に迫害を加えた。その時に善妙の龍が巨石となって空中に舞った。そうして悪僧どもをその石でつぶそうとした。悪僧どもはおどろいて逃げてしまった。浮石寺というのは石を浮かす寺といわれているのです。私も二年位前にここに行きました。大無量寿殿がここにありまして、そのうしろに大きな石がある。左背後に小さな祠ミヤがある。中を覗いて見ますと、善妙尼の像がそこに掛けられている。これはまさに善妙堂であります。善妙堂と申しますと、高山寺の周山街道にかつて善妙寺というのがあった。承久の乱によって未亡人になった人たちを、明恵上人が高山寺と違った所へ寺を建てて住ませました。それが善妙寺です。その中の一人の尼さんは明恵上人が亡くなったときに、その死を悲しみまして『華嚴經』の一品を血書致しまして、それが終るや清滝川に身を投じ後を追ったということがいわれておりますが、そういう因縁があるのです。直接何の関係もないのですが、韓国の榮州の郊外にある浮

石寺の裏にも善妙堂がひっそりと建っている。かつて周山街道の近くに善妙寺があった。明恵と義湘というのは国士は違いますが、大変な深い関係を持っていたんだということがこれによってもわかるのです。

『華嚴絵巻』の義湘絵をどう解釈するかといえば明恵自身の内部にあったものの中で一番似ていた人が義湘大師だったんだと。だから明恵は華嚴の祖師は義湘と元暁でなければならぬとして書いたのです。

元暁については元暁に『遊心安楽道』という浄土教の本があります。この中に土砂の加持のことが書かれております。土砂の加持というのは一つの土砂に光明真言を称えて、それに靈力を持たせる。その土砂をお墓の上に振りかける。あるいは人が死んだ時に死体の上にふりかける。そうしますと、その人は極楽浄土へ行けるのだということがあるようでして、私がかつて韓国の学者にそういう風習があるかと聞いて見ましたら、昔はあるいはあったかも知れないという答えを頂いたことがあります。とに角、元暁のこれ(『遊心安楽道』)にもとづきまして、光明真言土砂加持ということをも明恵は説いている。

明恵の内部に燃えていたもの、明恵が宗教的に求めていたもの、その投影としてもっともピタリしたものが義湘であり、元暁であったんだろうといえます。だからこそ弟子が『華嚴絵巻』を書くときに、華嚴の祖師の絵伝としては、義湘伝と元暁伝を書かざるをえなかったといえるだろうと思います。

それからもう一つ義湘との関連を考えて見たいと思う。明恵上人は「南無同相別相住持佛法僧三宝」という名字を書いている。名号を書いている。それを大変に拜んでおられた。礼拝の対象とされた。非常に簡略な文字の中に真理を見出そうというやり方を、義湘がやっぱりやっている。それは『一乘法界図印』というものです。これはわずかに七言三十句の詩に華嚴の法門をまとめまして二百十字を図のように書いたものです。あの歴大な華嚴教学を二百十字によって表わそうとした。明恵にその影響があるかと思えます。それは浄土教の法然上人の影響も十分にあったと思います。華嚴学の方から見れば、そういうこともいえるのではないかと考えられます。

以上、朝鮮華嚴との関連から明恵を考えたのですが、最後に、一言申し上げたいことは、これから華嚴学を考える場合には、どうしても朝鮮華嚴を研究対象に加えなくてはいけないのではないか、ということですが、

先程申し上げました浮石寺フシツジヤを朝鮮華嚴では北宗と申します。一方、全羅南道にある華嚴寺フワランジヤという寺が南宗の本山です。華嚴宗が南北二宗と分かれて、そうして華嚴の教義が展開してきたのですが、高麗の均如キョウニョがこれの一つに止揚した。この二つの系統を一つに綜合して一つの体系を作ろうとした。この均如の文献が戦前に刊行されて日本図書館にもかなりあると思います。また最近韓国でも発刊を考えているということですが、これらの文献を丹念に研究することによって、日本の奈良時代の華嚴に照明があてられるのではないかと思います。奈良時代の華嚴というのはわからないのです。奈良の終りに書かれたという『五教章指事』という書物がありますが、それが平安の初めという説もありますし、著者の寿靈ジュレイの年代がはっきり致しません。義湘の『法界図記』に註積した『叢髓録ソウズイロク』という書物があります。これは大正蔵四十五卷にあります。この中に新羅時代の華嚴宗の学者の説が盛んに引用されています。それを何とか整理して復元できないものか、と考えています。ある程度整理した段階で宋朝四大家の『五教章』の註積、これと綿密な教義内容の比較検討を加えると、朝鮮華嚴の特質が出てくるのではないかと、そうしますと日本の初期の華嚴思想史に一つの側面から照明を与えることができるのではないかと、ということですが、

例えば『五教章』を註積しました均如の『円通鈔』という本がありますが、その始めの方を見ますと、草本と鏤本と『五教章』の二種類の本についてのべられています。現在、『五教章』には、和本と宋本とありまして、下巻と中巻とが反対になっています。ちなみに大正大蔵経は宋本を採用している。ところが日本の註釈者は凝然を始め全部和本をよしとしております。この宋本と和本のことを考えますのに均如の華嚴学資料を活用することができているのか、と思います。従来は日本佛教、中国佛教のみ重視されて朝鮮佛教というものが欠落してしまったのですが、一つここで考え直さなくてはいけないのではないかということが華嚴教学の面からもはっきりするのです。

もう一つ朝鮮には高麗の初めに、知訥チヌという人がいます。この人は望月佛教大辞典にも載っていません。ところが普照国師知訥は、実は現在の韓国佛教の曹溪宗の開祖であるといわれております。この曹溪宗の開祖の知訥が李通玄に徹底的に依拠したのです。例えば『華嚴論節要』というものを書いてある。これは朝鮮半島には全くない、一冊もなかったのです。どこで見つかったか。金沢文庫にありました。かつて東国大学の金知見博士が刊行しました。つい最近、これに朱点が打ってあるのが今迄読めなかったのですが、国語学の築島先生のお教えによって、博士家の点の打ち方であることがわかりまして、訓点を附したのが『金沢文庫資料全書』佛典第二巻、華嚴篇と題されまして昨年金沢文庫から刊行されております。

これは李通玄の『華嚴經合論』の節要、抜粋であります。私はこの知訥の『節要』と、もう一つ明代ミンに活躍した思想家である李卓吾の『華嚴論簡要』とを較べる必要があると思います。そうしますと中国人の李卓吾と朝鮮の佛教者知訥が、李通玄のどこをとったのか、ということが分ります。それによって中国人の考え方と朝鮮の人の考え方の相異が分るのではないかという感じがするのです。

もう一つ、知訥の著書に『法集別行録節要並入私記』という本があります。これは従来、宗密の『禪門師資承襲図』の抜粋であるといわれたけれども、そうではないかも知れないという気がします。今迄、宇井伯寿博士もそういわれておりますし、私も最近出した本に、そのようなことを並べて書いておきましたが、もう少し検討する必要があるような気が致します。知訥は何を説いているかと申しますと、やはり宗密によりまして「先悟後修」ということを盛んに強調します。まず本来的に悟っておいて、そしてその上に慚悟してするのであると。

丁度、知訥が活躍したのは千二百年前後であります。千二百年といえますと、わが日本では永平道元が生まれていゝる。永平道元は本証妙修ということをいった。道元の思想の根本は本証妙修であるといわれる。これは朝鮮の知訥とは何の関係もないのですが、同じ十三世紀に同じような思想が強調されていることに大きな興味を抱くのです。

現在、知訥の建てた松広寺という寺は全羅南道の南の方にありますが、そこに修禪社が設けられています。その修禪社の中にはアメリカ人もいるしフランス人もいる。色んな人種の人が集まりました、ここで坐禪の修練をしております。日本の禪院よりも人里離れた全く山の中でありまして、そこに大きな伽藍が建っております。これが造られまして、そこが一つの修行道場になっているのですが、この修禪社のことなども今後色々と考えてみたいと思います。

話があちこちへとんだりしたのですが、まさに正統・異端ということは中国における正統を受けたから正統、中国における異端を受けたから異端だというに過ぎないのであります、別に正統・異端ということはありません。明恵上人にしろ、凝然大徳にしろ、どちらの両大徳ともひたすらに一方は求道に、他方は学問に生きたという面では共通しております。

以上をもって華嚴教学における正統と異端と題しまして、一言お話を申しました。御静聴頂きましてありがとうございます。

(了)

(本稿は昭和五十年十一月十一日、大谷大学佛教学会における特別講演の筆録を先生に加筆していただいたものである。)